

雑詠日記

海蝶息音

卷の一

二〇一五年

谷川  
修



日記に雑詠を書きとめるようになってから二十七年が経ち、それを毎年拾い集めた小冊子も九冊つづりが三巻になった。今年からまた新しい巻にするつもりで、名を「海蝶息音」と改めた。海辺の蝶の生活は身についたが、これから衰えるにつれて蝶の神経回路がどれだけ衰微するか分らない。せめて息災のころいきが口について出るように願いをこめての巻名である。漢字の「息」にはとどめるの意味もあるそう。和語の「いき」は「生きる」の語幹だろう。幸いに新たな日を迎えることができ呼吸するとき、何か意気ある音も口から出るように心がけたいと思う。

拙い雑詠よりも詩情あふれるH・ソローの散文に助言を求めれば、「比喻なしに語る唯一の豊かな標準語である神羅万象のことば」に聴き入らなければならない。「心が受けとめた印象」を身にしみこませて、「詩の種が自然に発芽するのをじっと待つ」ことだ。たとえば「それを記述することば」が生まれなくても、胸から諧調のある息が出てきますように！

一月一日 雪を見て孫と将棋の初手合い

一月五日 人間の生死を凝視、初行脚

一月六日 寒の入り老少不定身にしみる

二世代で三人の婿を迎えた家で、年末に九十二歳の人が入院したら、養女である姪が先立った。故人がその家の漆器を探しに来られたのは去年。

一月七日 病と死を見舞い世界を開示する言葉探して寒中を行く (九千歩)

まだ生きて七草粥で腹満たす

一月十日 いくたびか臨終を見て、知らず、生きるとはどういうことかを

一月十四日 人間の暮らしに起きる運不運乗り越える知恵在れ、湧き上がれ

葬式を出す家があれば、不運に苦しむ家がある。責めを当人だけに帰す

ことのできない社会状況がある。それでも、人は、運命を自分の生き方と不可分なものとして受け止めなければならない。

一月十八日

「今、この国でよく生きるために」——反「電通戦略」十訓

- 一、必要なものを使え
- 二、捨てるべきものを捨てよ
- 三、あるものを役立つように使え
- 四、季節のめぐりを味わえ
- 五、心のこもる贈りものをせよ
- 六、買うものを選べ
- 七、自己に根ざした動きを起こせ
- 八、根拠のある言動を保て
- 九、自他を助けるものを買え
- 十、秩序と平静をかちとれ

一月二十五日

悲鳴聞きたい李の幹を伐る老園丁に手鋸が一つ

長く不在だったこともあり三十年間まだ実が生ったのを見たことのない李の木のおかげで、実生の子が四歳ぐらいになったので、子の成長を妨げる親木の一番太い幹を、一つきりの切れ味わるい手鋸で伐った。直径およそ二十センチメートル。ぎしぎし音がしたのは李の声か。

一月二十七日

巣に帰る鵜の首長し冬の暮れ

一月三十一日

糸もなく鳶は北風やりすこす

一月が尽きてひそかに考えるこの生き方で果してよいか

二月一日

誤ってモッコウバラの幹を伐る形のできた手植えの庭の

二月十日

果樹の枝燃やす火を見て日をつくる

たとえこの行為が果報をもたらさないとしても、わたしは、よい午後を過ごせたことを喜びしよう。

二月十三日

風に火を献げて野辺の椿折る

二月十五日

ヴォートランの時代を超えた高説をかみしめながらせんべいを食う

二月十九日

わかめ刈り海に浮かんだ船大工に引導渡し胸そらす僧

二月二十三日

園丁の課植の園の春秋が桜と梅で動き始める

二月二十五日

風に揺られても  
端正な人が

地と海と拮抗して在る

(映画「ふしぎな岬の物語」)

二月二十八日

山鳥が春の訪<sup>おと</sup>い古き畑、  
今年の山は貧しいか

三月二日

青のりを干す人だけに陽の温<sup>ぬく</sup>さ

海鎮め陽は菜の花に宇賀の郷

三月六日

デコポンの樹形広げる布衣の春

三月十四日

地に座り瓦礫を集め、一本の草、菜の花を花器に挿す

三月十七日

若草の可憐な花を探す蛇

三月二十九日

花盛り得難い時を孫と得る

おちこちへどの道行くか百道<sup>ももち</sup>浜

(覚悟を促されている)

四月四日

野いちごの花も育てて荒地守る

幻想賦「江村春宵」

昼下がり、一杯の紅茶をすすって気分は和らぎ  
ひとしきり雨が降ったあとの空を、やがて陽が照らす  
音もなく聞こえる和音に導かれて丘への道へ向かえば

しだいに海の広がるのが見えてきて、頂上に出ると  
満開の桜が、老木の枝という枝に処を得て歌っている  
花々は空にたなびく雲へとつながり  
詩人たちが称えた春の夕暮れの中にわたしはいる

桜の下では藪椿が、ただ数輪の真つ赤な花冠で競っている  
ふと誘われて、咲き残る美しい一枝を採ろうと  
手をさし伸べたら、その時

さあーと風が吹いて、数えきれない花々が散ってきた  
襟首にも触れたと思つた瞬間、足をすべらせ  
体はつやのある椿の枝に運ばれて投げ出され  
花々とわたしは宙を落ちて行つた

身がゆっくりと回転するように舞う須臾の間  
脳裏を巡つたのは何だつたか

気がつけば、花筏に乗って海の上を流れてゆく  
なんというやすらかな時間だろう



そうやってどれだけ時が流れたのか

いつしか岸辺に漂い着いた

だれかが肩に手を添えて一つの家へと導く

わたしは、齢も見分けのつかない人と座っていた

桜花の漂着した郷に、秦人しんひとはいない

謎のような言葉を吐いて、その老人は一服の桜茶を勧めた。

わたしは影が薄いが、桜の花の漂着する浦を桃の花の咲く郷とすることが出来る。この庵で種々の花を育て、歌人氣取りで暮らし、また、ブドウ畑の広がる丘の上の塔で、思索してもいるのだ。漂泊の詩人のように、あるいは茅屋に住まう雲水のように、世を見つめながら、人生の苦勞を味わうこともできる……。

ああ、あなたは幻想をつむいでいるのですね。

さて、わたしがこの海辺の家でしていることを笑わないでくれ。ここには、過去のあらゆる精神が訪れて声をかけてくれるのだ、その再現がたとえささやかなものだとしても、君の迷いの生活よりはずっとよいはずだ。そういう場所へ、君は来て仲間に入ろうとしている、僥倖だと思わ

ないかね。ここにとどまれば、望みの未来を過ごすことができるだろう……。

でも、あなたの言葉にはたしかな意味があるのですか、あなたはまるで仙人のようにおぼろげだし、わたしはといえば、夢を見ているようだ。これは現実たりえますか。

君は現代がどんな世かを知らない。一片の花びらのDNAから一本の桜を仕立てることのできる世だ、花筏に乗ってきた君から君自身が生まれないとも思っているのかね。

でも、クローン人間は元の人間とは違います。

おお、なんというむごい言葉だ、……そのとおりだ……

君の言葉は、わたしが、過去に為した数々のしくじりを背負って、明日からも生きなければならぬことを宣告してくれた……。

老人が独り言をつぶやいている。

ここにはご覧のように広い机があつて、わきには花々が果てしなく散る黒い画面があるが、この舞台の向こうに何でも教えてくれる神がいるなどと、けつして考えてはいけない、意味を生み出すのは神経回路の巡る

四月五日

生きている人間の身心だ。ただ考えて何かをする方法しかない。そして、人間はだれでも人の人たる条件のすべてをそなえている、という言葉は依然として真理だ、なお何事かを為す力はそこから生まれる……。

いつのまにかだれもいなくなった

磯の香りがして、あたりを見渡すと

対岸の山の端に十六日の月があり

月の放つ光が、さざ波にきらめいて一筋の道をつくっている

まだ幻想の中にいるのだろうか

光の道の方へすうーっと足を踏み出そうとする

そこへ、まだ冷たい宵の風が吹いて頬を撫でると

耳に響いていた老人の謎の言葉が消えて

わたしは正気に戻った

しかし、ここはどこだろうか

、まちづくり、小雨についてピクニック石櫛残る丘の頂

(地方創生)

四月九日

「知者に和す」

ホルクハイマーとアドルノの言葉に促されて

地を這うようにして土に親しみ

果樹や野菜を助けて自然と交わる

この営みを対話にまで高めて

受けとったものを言葉にして

わたしという自然と天地という自然を

詩に歌って返そう

結実を果せぬ果樹の花あまた

いのち湧く山縫って行く春の道

四月十七日

白頭をかすめツバメの使者が行く

四月十八日

山際の枯葉舞い上げ進む汽車春にまどろむ旅人を乗せ

畑護る色あざやかな風ぐるま四方から来る春の風待つ

平成の子をのぼり立て祝う店「水は命」と井戸掘り誇る

四月二十五日

湖に山藤の瀧落ちかかる

知恵欠いて臍の春に放心す

五月二日

若葉光り何か虫鳴く耳の奥

五月の静寂、樹液の流れる音、血の巡る音

静かに光る、内海の、白濁山は、山のない岸、鯨が回向

五月三日

冊子『みすず』五月号の今福龍太「ヘンリー・ソロ 野生の学舎」は、タイトルが「音楽と沈黙」。わたしが書きとめた語句を圧倒するソロの散文を、華麗な楽曲に仕立てて奏でている。ソロが言っている、「正気の人間にとって世界は楽器である。それを奏でることのなかに無上の喜びがある」、また、「音楽は自然の血管をめぐる血流の音である」と。

五月十日

花切つて幼い柿を慈しむ

五月十二日

風唸り父母の形見のスモモ散る

(夜半、七、八個すべてが)

休息を恵み若葉を洗う雨

(地を這う者に慈雨)

五月十七日—二十日

安芸・備後・伊予・周防を自動車で周遊。

時刻む編み竹の綾古き町

水道を見下ろし神の座に座る

卯の花や小雨に煙る瀬戸の海

樹陰から櫓見て聞く子規の声

城下りるリフトの下に栗の花

草花と格子の軒に金魚たち

五月二十八日

労癒す五月の萩と十日月

煮干し作業場址に植えた果樹の下にはスレートの破片が埋まっていたが、孫たちに食べさせるのにそれが気になって、除去を思い立った。三月以来、三時間余りの地を這う作業をおよそ三十日。ようやく計画を果して一息ついたら、海側の屋敷内の赤萩が咲いているのに気づいた。この萩は毎年きまって秋だけでなく初夏にも咲く。海岸に立って海を眺め、ふり返ってまだ明るい空を見上げれば十日の月。芭蕉の萩と月ではありません。

五月三十日

梨の葉のリーマン面で星々が爆発する

わたしの小宇宙は、静かに内海を抱いている

さあ、かき集めた星雲は母なる海へと沈めようか

六月三日

蝶の子の粉わが腕に点描画

（蝶が蝶の子の粉に免疫反応）

六月十日

想念は干潟と海ともやの先

（もと結核療養所だった病院から見る）

六月十三日

一輪の小ぶりのあじさいの下  
幼くして果てた果実たち

スモモ、ナシ、リング、カキ、アーモンドが  
輪をつくって集まっている

語るともなくお互いを見つめて

果を成すことを果しえなかったことを

しみじみと観想している。

そのうちみんなが頬笑んだ

みんな小さいながら立派な形をしているな

それに種には成すはずだったものを

つくりあげているじゃあないか。

幼くして果てた果実たちが

輪をつくって頬笑んでいる

睡蓮は世と隔絶し純白に

睡蓮は折り目正しく花を閉じまた瞑想の時間に入る



六月二十二日

名水を誇る谷筋緑なす美田が続く、時代に耐えて

(旅へ)

峠道それでも荒れて草茂る、看板掲げ農政批判

六月二十三日

雨上がり龍頭が躍る二荒山

(奥日光)

六月二十四日

遣り水を聞く名園に梅熟す

(横浜三溪園)

緑風に横笛を聴く合歓の花

(横笛庵のそばに笛を持たない横笛の像)

七月五日

梅雨寒や老いも子供も浜掃除

七月六日

EUに抗しエウロペ乱れ髪

七月七日

咲いてない夏の草と花を開いた秋の草が  
雨雲におおわれて名を恥じる小暑を観る  
これも名を負いかねる一輪のコスモスは

小さな第三惑星の少なからぬ変動を知る  
じつにさまざまな人生がありうることを  
わたしはいっこうに理解していない

七月十五日

大きくなれスイカ初めて夏陽射す

七月二十二日

數十匹、李の敵を退治する

七月三十一日

くちなしが大暑に一つ花開き時運を告げて静かに香る

八月六日

御天道に焼かれ無花果は果も成せず

八月八日

口開けて声もあげずに直立し生き物たちと旱天仰ぐ

八月二十五日

長田弘『最後の詩集』讃

もう何日も「詩」の生まれるのを待っている  
台風は朝から閉じこめられた一日

八月二十九日

夏がすっかり終わって秋気が満ちた  
それでもまだリズムのある言葉が出てこない  
身と心をのびのびと自由にさせて  
喜びがにじみ出る時をつかみたい  
見ているすべてのものが  
手助けしてくれるだろう  
秋を始めてみよう

蜻蛉の雌雄の舞いが暑気を消す

八月三十日

長田弘『最後の詩集』讃、二

昔ずっと昔ずっとずっと昔

一人の詩人があった。

身のまわりのどこにでも詩を見つけようとし

実際、それを詩にして言葉にのせた。

それは凝り過ぎず、比喩も過ぎず

だれにでも受けとれるような諧調をもった。

自分の姿を写す写真を隠しもせず、  
人がどのように歳をとるのかを示した。  
人間が事物の一つとして

青空の下にあることを論じた。

そして、人生と詩とを全うしながら

覚悟の中で、空からそそぐ光を讃えた。

いつのことだ、つい昨日のことだ。

九月一日

蟪蛄の斧持つ者と顔合わす

(まだ少年だった)

九月十一日

長雨のあとの秋晴れもの皆と心楽しむ日を受けとめて

長く伏す青大将に秋気浸む

(翌朝息絶えていた)

夕陽を浴びて飛ぶボウ腹光る

(昨夜、東日本では水害)

九月十八日

窓を開ければ式部は紫、小さな声で小さな歓喜

九月二十一日

大海の空に一つの輪描く鳶

九月二十四日

ことだまをなみするものに天から落首

ことだまのにぎわうくに、そうだなことばおどらせ、  
ふかのうにまなこもむけず、よいしれかたるものみれば、  
このくにのゆくすえをこそ、いたくあやぶめ。

今の時代になつて戦後最大の経済と豊かさを築くと語る演説。文章を書いた者も語った者も、真実を見る気がなく、言葉を信じてもない。

十月八日

笑み浮かべ汽水でハゼを釣る婦人

十月九日

修行者は白虎とともに陽の陰に

狂い咲く桜二つ三つ黄な蝶と

知恵大き蜘蛛天高く網を張る

十月十日

コスモスを見つめる

赤・白・桃の花をじっと見つめて

コスモスから来る光がわたしの網膜を超えて

身の内に広がってわたしが見えるように。

じっと耳も澄ます。

十月十四日

つわぶきのひとひらの花、舞い、蝶に

十月十九日

いちご植えすでに五月の陽を思う

十月二十四日

海乾き漁夫に風吹く深き秋

十月二十五日

老い猫が首かしげ見る十三夜

十一月五日

鵜の島に 黒い鵜が五羽 風ぐ海に 小さな岩の 鵜の共和国

十一月八日

一つ柿を烏帽子の者と分けて食う

十一月十五日

石櫛のわきの桜に小春の陽

(この時季に咲く桜)

小春日に蕪村の鷺が陽を浴びてうしろに脚をそろえて飛ぶよ

十一月二十六日

文を出し時雨を急ぐ老隠者

十二月三日

青鷺の寒さに耐えるいかり肩

音楽を楽しむものは人だけぞ、ピアノデュオ聴きぬくもりを待つ

十二月八日

宰相に異議を唱えた僧その後縊死したという、自由無き国

首相の本貫の地で講師を招いて戦争法案反対の講演会を開催した僧。

十二月十六日

野いちごの赤い実を見るカント像

(耕作放棄地のそば、冬に野いちご)

十二月十七日

初雪に蝶ちぢこまる果樹の下

(シックな紋様の赤茶色の蝶)

十二月十九日

現代にも奇跡、聖女に列せられた人

十二月二十五日

歳末に気休めを売るコマーシャル

宰相が気休めを言う国の暮れ

十二月三十日

年の瀬に鵜飼をめぐる空想で日々を過ごして人の生なす

十二月三十一日

「この四季は海馬を待む者の旅」 意句僅到也有事

春、

にぎわい始めようとする小川の岸で  
入学をひかえた子が野の花を摘んでいる  
その向こうにすももの畑が広がって  
花々が咲き誇り 白い者がひらひらと  
あれは花？ それとも紋白蝶？  
かなたには芽の息吹き出した林や森、



大地を越えて何かを求め遠く山の方へ蝶が飛んでゆく  
蝶は馬に乗っているのか ふうわりと駆けてゆく  
ああ、これらすべては海馬を待む者の夢

有事高々峰頂立

夏、

木々が鮮やかな枝を伸ばして成長する時  
霖々と降る小雨の中を行く小舟がいる

海は深く果てしもなく広がって

漕ぎ手であり舵取りでもある者はどこへ？

雨粒がそこだけ多く垂れるところが二筋

あいだにはさざ波もなくなめらかに続く帯、

その海の底深く小舟を先導するように蝶が飛んでゆく

蝶は馬に乗っているのか ふうわりと駆けてゆく

ああ、これらすべては海馬を待む者の夢

有事深々海底行

秋、

空気が澄んで身も心も軽やかにする時

銀色のすすき野の中を行く者がいる

やがて黄葉の木々が林立するところを過ぎて

道は下って清冽な川の流れる深い谷間へ

水をすくって口をうるおせば 対岸には崖

楓の生えた巖頭に静止している白いのは何？

目を凝らせば岩の奥深くへいつまでも蝶が飛んでゆく

蝶は馬に乗っているのか ふうわりと駆けてゆく

ああ、これらすべては海馬を待む者の夢

有事延々石中留

冬、

日が落ちてすでに長い時が過ぎて

漆黒の凍てついた大地が広がっている

すべての物が姿を消して 行人もない

それなのに見ることもかなわぬ何かがひそみ

曲線を描く地平のかなたへ身をおどらす  
あれは翅もすりきれ色を失った者か？

星だけの見える空なる闇をどこまでも蝶が飛んでゆく  
蝶は馬に乗っているのか ふうわりと駆けてゆく  
ああ、これらすべては海馬を侍む者の夢

有事暗々星間翔



二〇一六年 正月  
白江庵 謹製



『最後の詩集』 長田 弘

・・・・・・・・・・

わたし（たち）のすぐそばに  
一緒に生きているものたちの

殊更ならざる真実の、慕わしさ。

それら、物言わぬものたちが

日々に徴している親和力によって、

人は生かされてきたし、救われもしてきた。

そのことを無事、大事と考える。

季節のなかに、黙って身をさらし、

ただに、日々の季候を読む。

・・・・・・・・・・

